

## 明治時代の台風「6月流れ」について（その2）

伊集院 久 吉\*

明治28年7月24日(旧暦6月3日)の台風「6月流れ」に関して、筆者は昭和30年5月号の天気誌上に当時の台風経過や模様について書いたのがあったが、その後更に「6月流れ」に関する文献を知ることができたのでここに追報として発表してみる。

枕崎市の隣接町(西方)坊の津町の川崎市次郎氏は昭和11年3月15日発行した「坊泊水産誌」の中にこの「6月流れ」について次のように記述している。

暴風による遭難船表

年次	名称	風力速度	難波	備考
明治28. 7. 24	烈風	25.0米	11隻	
今に里島流れと称す				イ1号船難にて破船全船員30

名死亡船体は当沖合に漂流し居たるを舍船曳帰る(船頭長浜長之助) 舍1号船, 臥蛇にて破船4名死亡(船頭佐藤善蔵) 舍吉2号船黒島にて破船, 23名死亡(船頭大谷喜平次) 舍3号船, 平島にて破船, 6名死亡(船頭長谷矢四郎) 日高猪之助船黒島にて破船全員死亡30名位(船頭宮田甚蔵) 石井新造船同じ30名位, 谷川善太郎船黒島にて破船(船頭紀助) 6名死亡。

○3号船黒島にて破船乗組員30名中幾分生き残る(船頭日高三吉)

イ2号船平島にて難波乗組員無事。

森十次郎運搬船は4名乗組の内生存者1名郡内にて難波 231隻死亡 713名に達す(黒島にて遭難船多し) 枕崎破船23隻死亡数 411名。

この悲惨事に関して枕崎警察署(当時は南方警察署)はその沿革史の中に名文を以て次のように述べている。

○枕崎警察署沿革史の一節(原文のまま)

明治28年7月24日暴風あり、陸上の損害特記すべきものなし、海上の樁事は聞くに戦慄措く能はざるものあり、是れ実に509人の生霊を海底に葬りたる惨事にして、即ち東南方村枕崎中村吉次郎外12人の所有鯉漁業帆船13隻は出漁中大島郡黒島近海に於て風波の為難波し溺死

を遂げたるもの 360名、同村小湊篠原益雄外2名の鯉漁業帆船3隻亦同海において小湊善蔵の鯉漁業帆船1隻は既島近海において風波の為破船し溺死を遂げたる者99名西南方村泊早水直次郎外2名の鯉漁業帆船3隻猶黒島近海において破船し溺死を遂げたる者50名以上の屍体は大部分黒島に漂着したるを以て南方警察分署長伊集院警部は同島へ出張し検視を為したるも腐爛に近き数多の屍体は其誰たるを識別するに由なく、山なす屍体は石油を注ぎて焼却し遭難者の遺族は其骨灰を分配して土葬を為したり之を称して黒島流れと云ひ東西南方村に寡婦多きを見るは是れに基くもの多し。(註、南方警察署長伊集院警部は名は与助、明治25年より31年まで南方警察署長として在職された功労者(出身地は多分鹿児島県肝付郡乗水町と思われる)と枕崎の古老は語る)(この沿革史は浜田枕崎警察署長の御好意により筆者が書写したものである。ここに深謝の意を表す)。

この悲惨事について明治天皇は枕崎同様坊の津町(西南方村)に対しても侍従を御差遣御下賜金を給われた。この事に関して「坊泊水産誌」は次のとおり記述している。

「28年7月24日の暴風には今に黒島流れと言ひ伝えられる位で惨状言語に絶し坊泊の破船11隻死者 165名、枕崎は 411名郡内を通じて 713名の溺死者を出した。畏くも聖上陛下には特に花園侍従を御差遣親しく惨状を視察せしめ給い金一千元の御下賜あり、郡内の船主及遺族を枕崎に集めて、有難き御慰問の辞を拜受した。鹿児島新聞社は義捐金を募集し其金額二千余円に上つた」

以上の文献によって、当時日本国は日清戦争によって戦勝国として上下をあげて、喜びに浸っていたさなかであったにもかかわらずこの悲惨事が一大事件として如何に国民の心を強く打ったかがわかるのである。そして当時明治天皇がこの海難事件について如何ばかり御心を痛められたかを拝察する時思い半に過ぎるものがある。

ところで当時物価はたとえば白米は1升幾許であったか? 参考までに枕崎市の長老の木原泰蔵氏(元町会議員

\* 枕崎測候所—1958年7月11日受理—

81才)にお尋ねしたところ「当時は白米1升8銭であつたが後で10銭に値上げになった」とのことである。現在白米1升122円位であるから物価は正に当時の1525倍位になっている訳である。ともあれ当時と現代とは物価の相違も去ることながら、機械文明の発達、学問の進歩などに隔正の感がある。すなわちこの「黒島流れ(6月流)」の被害は現代ならば、無線、ラジオ、新聞などの報導で殆んど防止または軽減可能であつたらうと考えられるのである。そしてこの台風は鹿児島島の最大風速12米6であった点から考えて、暴風区域の狭い豆台風であつたものと推定されるので、現代のように機械化された大型カツオ漁船であつたならばこの暴風は乗切て帰港できたであらうと思われるし、また被害あつたにしても極く僅少であつたらうと推察されるのである。

さてこの台風は枕崎の住民達は「6月流れ」と称しているけれども、枕崎警察署沿革史や坊の津町では「黒島流れ」と称しているので「黒島流れ」と称してよい訳で

ある。

ところで筆者は昭和31年10月号の「天気」の雲鏡欄において「6月流れ」は6月台風であるから、我国気象外史(筆者の仮称)における台風名第1号ではあるまいかと提言したが、今回の文献により「6月流れ」は「黒島流れ」であり、従つて「黒島台風」であると言える訳である。そこでこの「黒島台風」は筆者が提唱する「我国気象外史における台風名第1号」であると言う感じをいよいよ深くせざるを得ないのである(昭33.7.11 枕崎測候所)。

参 考 文 献

- 1) 茶屋道久吉(伊集院), 1955: 明治時代の台風「6月れ」について, 天気, 昭30.5月号
- 2) 故川崎市次郎, 1936: 坊泊水産誌(昭11.3.15) 川辺郡水産会発行
- 3) 枕崎警察署: 枕崎警察署沿革史

以上

学 会 消 息

1. WMO の会議予定 (1960—1963年)

WMO の第10回執行委員会が発表した会議予定の主なものはつぎのとおりである。

1960年	前期	海上気象委員会	第3会期
	前期	気候委員会	第3回会期
	6月—7月	第3回	第3地区会議(リオデジャネイロ)
		図書刊行物委員会	第3回会期
1961年	年初頭	第3回	第1地区会議(カイロ)
	7月—9月	高層気象委員会	第3会期
		測器観測法	//
		農業気象	//
1962年		第3回	第4地区会議
	10月	第3回	第5地区会議(ヌメア)
		第3回	第2地区会議
		航空気象委員会	第3回会期
		シノプチク気象	第3回会期
1963年		第4回	世界気象会議

2. WMO 第3回世界気象会議

明年(1959年)4月, ジュネーブにおいて第3回世界気象会議が開かれる。世界気象会議は4年毎に開かれるWMOの最高会議である。

3. WMO 第2回第2地区会議は延期

WMOの第2回第2地区会議は、パキスタンのカラ

1958年9月

チで9月16日から開かれる予定であつたが、カラチでの開催が不可能なため改めて会場、会議がきまるまで、この会議は延期となつた。

4. 放射性エエロゾル研究連絡会発足

放射性エエロゾル (radioactive fall-out を含む) を共同の研究対象としている有志の研究連絡を主としてこの会が生れた。第1回は8月28日、気象研で川野氏による「自然放射能の観測結果」が報告された。2回目は9月12日に立教大学で道家氏の「国連科学委員会報告の紹介」があつた。

例会は月1回、研究会代表者は気象研究所伊東暈自。

5. 台風予報に IBM 650 型電子計算機を使用

来春から大型計算機 (IBM 704) が予報部に設定されるが、今年はその準備の意味もあつて、中型計算機 (IBM 650) を用いて台風進路の予報を予報部において気象研究所の協力を得て行つている。今年には48時間数値予報を今までに台風17号, 19号, 21号の3つについて行なつた。モデルは、「流線関数を用いた順圧予報」で、48時間予報のためには48回の step (1時間間隔) をふむが、計算速度が早いので、資料の読取りがすんでから4時間で48時間の予報が印刷される。仮りにこのモデルを用いてIBM 704で計算させれば15分程度で結果がでてくる。結果は大体良好。客観的な予想中心位置が48時間まで日本でも求められるようになったことはすばらしい。